

## 鄴城の哀歌

―旧北齐文学者たちによる詩をめぐって―

住 谷 孝 之

### 序

鄴は、現在の河北省邯鄲市臨漳県にあった都市であり、後漢末から南北朝時代の間、華北の王朝の都として繁栄した。中国文学史上においても、鄴という都市は、建安文学の発祥の地として知られるのみならず、西晋の文学者、陸機「弔魏武帝文」より以後、数多くの文学作品の傑作を生み出す題材としても歌い継がれてきた。筆者は、そのような鄴を題材とした文学作品に注目し、それに関する論文を書いてきた（「六朝詩における「銅雀台」―六朝期に成立した「詩跡」の特徴について―」<sup>1)</sup>、「陸雲「登台賦」考―詩跡と懐古の二側面から―」<sup>2)</sup>。前者では、いわゆる「詩跡」<sup>3)</sup>としての鄴城という側面に着目し、前述の陸機の「弔魏武帝文」を発端として、南朝の文学の中で鄴が詩跡として成立していく過程を論じた。それと同時に、鄴に代表される六朝の詩跡が、唐代に成立した詩跡とは違う独自性が存在することを指摘し、その理由を考察した。後者では、前者の補論として、陸機の文と同時期に書かれ、やはり同じ鄴城を題材とした陸雲「登台賦」を扱った。陸雲の作品の実態がどのようなものであるかを具体的に読み込むことで、陸機の文と異なり、鄴を題材とした後世の文学的形象の起源となり得なかつた理由を考察してみた。

本論文では、南北朝時代の後半、北朝（東魏・北齊）の都としてふたたび繁栄し、そして北齊滅亡後に廢墟となった鄴の姿を詠じた一連の詩に注目し、それが南朝前・中期に出現し、唐代に懷古詩として完成した「詩跡」としての鄴城とどのような相違点が見られるかを考察する。さらにそれが文学史的にどのように位置づけられるかを論じることにはしたい。

一

本論に入る前に、この節では、都市としての鄴の歴史を簡単に振り返っておくことにしよう。

鄴の繁栄は、後漢末の群雄だった曹操が、建安十八年（二二三）、後漢最後の皇帝である献帝によって魏公に封ぜられた後、ここを魏国の都としたことから始まる。以後、曹操は鄴に魏の宮殿や官衙を新設するなど、大幅な造営・整備を行った。建安十五年（二一〇）、鄴城の西北にある御苑「銅雀（爵）園」と、その西北隅（鄴城の西壁上の北端近く）の城壁に氷井台・銅雀（爵）台・金虎台の「三台」（「台」は樓台のこと）が建造された。この三台のなかで中央に位置した銅雀台は、「高さ十丈（約二四メートル）、屋百一間有り」（『水経注』一〇、濁漳水）と最大の規模を誇り、最も著名であった。

その後、西晋の時代に都としての地位は失ったが、それでも人々には魏の旧都として意識され、河北における一大都市の地位は保ち続けた<sup>①</sup>。時代が下って、五胡十六国の後趙・前燕・後燕、また北朝後期には、東魏と北齊がそれぞれここを都とした。特に東魏・北齊の時代には、儒家の設計プランにもとづき、従来の城の区域の南側に、あらたな区域（南城）が拡張された。さらにこの南城では、宮殿および中軸道路を中心として、城全体を左右対称とする理念が追求され<sup>②</sup>、やがては隋唐の長安城に引き継がれる都城として新たなモデルになったことが注目される。だが北齊が北周に滅ぼされると、鄴そのものは国都としての地位を失う。そして北周の末年（五八〇）、当時鄴にいた將軍の尉遲迥は、權臣楊堅（後の隋の文帝）に対して反乱を起こし挙兵した。尉遲迥が敗死した際、鄴城は徹底的に破壊されて廢墟と化し<sup>③</sup>、以後、都市として

の鄴城は、歴史上から姿を消すに至るのである。

二

以上が都市としての鄴の興廢の歴史であるが、次に東魏と北斉における鄴下の文学活動がどのようなものだったかを見ていきたい。<sup>(7)</sup>

天保元年（五五〇）、東魏の孝静帝から禪讓され、北斉を建国した高洋（文宣帝）は、即位後の天保七～九年（五五六～五五八）にかけて、銅雀台を含む鄴の三台を築き直し、宮殿や庭園を築いた。そして多くの文人が集められ、鄴を中心に文学・学術が隆盛することになった。そのさまは、「有齊自霸圖云啟、廣延髦俊、開四門以納之、舉八紘以掩之。鄴京之下、煙霏霧集」<sup>(8)</sup>（有齊の霸圖 云に啟きしより、広く髦俊を延き、四門を開きて以て之を納れ、八紘を挙げて以て之を掩ふ。鄴京の下、煙霏霧集す）と述べられるほどであった。また、北斉末期の後主（高緯）の時代には、宰相である祖珽の上奏により文林館が設立され、彼の監撰のもと、北斉の主な文人・学者六十余人を待詔文林館に任じて、大規模な類書である『修文殿御覽』の編纂が行われたことも、北斉期を代表する文化活動としてあげられよう。<sup>(9)</sup> 当時の北朝は、北斉の北周の東西両国が並立していたが、太行山脈の東に広がる華北平野を占める北斉は、豊かな経済力と人口を擁する国家だった。文学史が南朝中心に編まれてきたために、私たちは北斉の繁栄を忘れてしまいがちなのである。

このような環境の下で、北斉の宮廷でも詩文の制作が行われるようになっていた。<sup>(10)</sup> 例として以下に紹介する蕭愨の詩は、詩題から推測して、鄴城の西北にあった西園（別名、銅雀園）で催された宴で作られたものであろう。

北斉・蕭愨「奉和初秋西園應教」〔初秋の西園〕に和し奉る 教に応ず 詩<sup>(1)</sup>

池亭三伏後 池亭 三伏の後

林館九秋前 林館 九秋の前

清冷間泉石 清冷たり 泉を間へだつる石

散漫雜風煙 散漫たり 風に雜まじふる煙

葉開千葉影 葉開はすきて 千葉影あり

榴豔百枝然 榴りゅう艶にして 百枝も然ゆ

約嶺停飛旆 嶺を約ひして 飛旆ひはを停め

凌波動畫船 波を凌なぎて 画船動く

この詩は、魏の曹植ら建安詩人が創始した「公讌詩」の典型を踏襲している。公讌（公宴）の詩とは、宴が催された宮城の庭園の美しさを描写し賛美することで、そうした場を設えた主人（本詩では詩題の「応教」という語を見るに、北齊の皇族の一員と推測される）への感謝と清栄への祈念を述べることを主な内容とする。本詩においても「池」「林」「泉」「石」などの庭園に設置された景物、そこに咲く「菓」（ハス）や「榴」（ザクロ）の花々、「飛旆」（車）や「画船」といった宴に参加した人々の乗り物等が、初秋の西園をいろどる情景として描写されており、その点でも、公讌詩の伝統に従うものといえる。

次の裴訥之の詩も、蕭愨の詩同様、鄴を舞台にした公讌詩である。詩の内容、とりわけ第一句の「晋楚」や第二句の「僑札」（春秋時代の鄭の子産と呉の季札）の語から推察するに、北齊（または東魏）を訪れた他国（おそらくは南朝の梁陳）の使者をもてなす宴の場で詠まれたものであろう。

北斉・裴訥之「鄴館公讌」(鄴館の公讌) 詩

晉楚敦盟好 晉楚 盟好を敦くし

僑札同心賞 僑札 心賞を同じくす

禮成樽俎陳 禮成りて 樽俎陳び

樂和金石響 樂和して 金石響く

朝雲駕馬進 朝雲 馬を駕して進み

曉日乘龍上 曉日 龍に乗りて上る

雙闕表皇居 雙闕 皇居を表し

三臺映仙掌 三台 仙掌を映す

當階篁篠密 階に当たりて 篁篠密なり

約岸荷蕖長 岸を約して 荷蕖長し

東帶盡欣娛 東帶 尽く欣娛す

誰言驚歸兩 誰か言はん 驚せ帰ること 兩ひなりと

こうした鄴を舞台とした公讌詩の出現は、二つの事実を窺わせるだろう。第一には、東魏とこれを引き継いだ北斉において、鄴が公讌詩の舞台となるほどに整備され繁栄した都城として再興されていたことである。そして第二には、鄴が曹魏の故都であり、そこにはかつて建安の文学者たちが集い華やかな公讌詩を詠んだという歴史の記憶がありありと思い出されていることである。二点のうち、どちらか一方が欠けても、この鄴でこうした公讌詩が作られることはなかったであろう。

こうして北朝後期に至って取り戻された鄴都だが、その繁栄は「一」の節で述べたとおり、北斉の滅亡と北周末に起きた尉遲迥の反乱という二重の戦災を受け、都市としての鄴自体が地上から姿を消したことによって終わりを告げた。

廢墟と化した鄴の都は、北斉および北周の滅亡後ほどなくして、その繁栄の姿を自ら知るものたちによって、詩に写し取られることになる。そうした詩で現存するものは以下の四首である。

隋・孫万寿「和周記室遊旧京」詩

同「行経旧国」詩

隋・元行恭「過故宅」詩

隋・段君彦「故鄴」詩

最初に孫万寿の「和周記室遊旧京」詩と「行経旧国」詩の二首を見てみよう。

隋・孫万壽「和周記室遊舊京」(周記室の旧京に遊ぶに和す)詩

大夫愍周廟　大夫　周廟を愍いたみ

王子泣殷墟　王子　殷墟に泣く

自然心斷絶　自然、心　断絶す

何關繫慘舒　何ぞ慘舒に繋がるるに關せん

僕本漳濱士	僕は本と 漳濱 <small>もと</small> の士
舊國亦淪胥	旧国 亦た淪胥せり
紫陌風塵起	紫陌 風塵起こり
青壇冠蓋疎	青壇 冠蓋疎なり
臺留子建賦	台は留む 子建の賦
宮落仲將書	宮は落つ 仲將の書
譙周自題柱	譙周 自ら柱に題し
商容誰表闔	商容 誰か闔に表さん
聞君懷古曲	君が懷古の曲を聞き
同病亦漣如	同 <small>とも</small> に病みて 亦た漣如たり
方知周處歎	方 <small>まさ</small> に知る 周處の歎
前後信非虛	前後 信 <small>まこと</small> に虚に非ざるを

【大意】

かつて東周の大夫は、西周の宗廟が荒れ果てていたのを悲しんで「黍離」の詩を作り、また殷の王子だった箕子は、かつての殷の都が廢墟になったのに泣いて「麦秋」の詩を歌った。人の心はおのずと悲しみの情をいだかずにはおれぬもの、その気持ちは王朝の盛衰ばかりに関わるといふものではない。だが、私はんらい北斉に仕えた士として漳水のほとり（鄴）に住む身であり、その故国もまた（周や殷と同様）滅亡した。鄴都の華やかかりし都大路には、戦塵が立ちこめ、（その後）天子が厳かに天地を祀った青壇には、もはや貴顕の群臣の姿を見ることがない。銅雀台には曹

植（子建）の書いた「銅雀台賦」が残っているが、宮殿に高く掲げられていた草誕（仲將）の書いた扁額は落ちてしまった。（むかし）蜀の譙周は自ら柱に（蜀が魏に滅ぼされるのを予言する）文句を書きつけたというが、今いたい誰が、殷の商容のごとく村の表門に殷の滅亡を非難する表を掲げたりするだろうか。私はあなた（周記室）の昔をしのぶうた（詩）を聞いて、あなたと同様に心を痛めて涙を流す。かつて呉の周処は、魏と呉の王朝が前後して滅びたことに感慨を抱いたと聞かすが、その気持ちに偽りでないことを今まさに知り得たのだ。

孫万寿は、この詩の冒頭で、北斉王朝滅亡と鄴の荒廢の悲哀を、『詩経』の「黍離」や『史記』の「宋微子世家」に見える「麦秋歌」を引き合いにして歌っている。

無名氏「黍離」<sup>(1)</sup>

彼黍離離

彼の黍 離離たり

彼稷之苗

彼の稷 之れ苗あり

行邁靡靡

行き邁くこと 靡靡たり

中心搖搖

中心揺揺たり

知我者

我を知る者は

謂我心憂

我が心憂ふと謂ふ

不知我者

我を知らざる者は

謂我何求

我を何をか求むと謂ふ

悠悠蒼天

悠悠たる蒼天



此何人哉 此れ何人ぞや

無名氏「麥秀歌」<sup>(15)</sup>

麥秀漸漸兮 麥秀 漸漸たり

禾黍油油 禾黍 油油たり

彼狡僮兮 彼の狡僮

不與我好兮 我と好からず

「黍離」は、漢代に成立した伝統的な『詩経』解釈学では、東周の大夫が西周の都鎬京の跡地を訪れ、それが廢墟となつた姿を嘆き、亡国を招いた君主（周の幽王）への非難をこめて歌つたものと解している。<sup>(16)</sup> 同様に「麥秋歌」も、出典となる司馬遷『史記』宋微子世家によれば、殷の王子箕子が、かつての殷の宮室のあつた場所を訪れ、そこが麦や禾黍の生い茂る畑と化していることを嘆き、自らの諫言を聞き入れず国を滅ぼした暴君（殷の紂王）を非難した内容と解釈する。<sup>(17)</sup> 伝統的な解釈では、いずれの詩も、滅亡した王朝の旧臣が、かつての王都の荒廢を目睹し、亡国の暴君・暗君の好意を批判する意図が込められているとする。

孫万寿の詩は、これら「黍離」「麥秋歌」の伝統的解釈を敷衍しつつ、そこに「僕本漳濱士、舊國亦淪胥」と、亡国（旧北斉）の臣としての自らの立場を重ね合わせている。続く「紫陌風塵起」以下の四句では、戦禍に遭い荒廢した鄴の姿を、過去の栄華をしのばせる語（紫陌・青壇・冠蓋・子建賦・仲将書）と対比させるかたちで描写する。そして「譙周自題柱」以下の結びでは、過去の亡国の臣たち（譙周・商容・周処）が亡国を嘆き時の君主を非難した事績を列挙することで、孫万寿みずからもまた、北斉滅亡を嘆くと同時に、鄴をこのような姿に導いた暗君（北斉の後主）への批判を明らかにする。

このように孫万寿の「和周記室遊旧京」詩という作品は、「王都の荒廢の描写↓亡国の君主への非難」という、「黍離」「麦秋歌」の伝統的解釈のかたちを忠実になぞった構成をとる。こうした構成をとることからも、本詩の主眼が「自らの仕えた王朝滅亡への嘆き・亡国の君主への非難」にあることは明かである。

孫万寿は、鄴の破滅を容易に受け入れることができなかつたのであろう。次に読む「行経旧国」の詩でも、廢墟と化した鄴の都を万感の思いを込めて書きとどめている。

隋・孫萬壽「行經舊國」(行きて旧国を經たり) 詩

蕭條金闕遠

蕭條として金闕遠く

悵望羈心愁

悵望すれば羈心愁ふ

舊邸成三逕

旧邸 三逕を成し

故園餘一丘

故園 一丘を余すのみ

庭引田家客

庭に田家の客を引まねき

池泛野人舟

池に野人の舟を泛ぶ

日斜山氣冷

日斜めにして山氣冷やかに

風近樹聲秋

風近くして樹聲秋なり

弱年陪宴喜

弱年 宴喜に陪したがひ

方茲更獻酌

方に茲こゝに更こゝも獻けん酬しうす

脩竹慚詞賦

脩竹 詞賦に慚はじ

叢桂且淹留

叢桂 且しばらく淹留ちうりうす

自忝無員職	自ら忝 <small>かたじけな</small> くす	無員の職
空貽不調羞	空しく貽 <small>のこ</small> す	不調の羞
武騎非吾好	武騎は吾の好むに非ず	
還思江漢遊	還 <small>ま</small> た思ふ	江漢の遊を

孫万寿はこの詩において、眼前にある荒廢した鄴城の姿を見、そこから往時の栄華を極めた鄴都での自らの事績に思いを馳せる。そこでは「自忝無員職、空貽不調羞」と、当時の自分を卑下する言葉を入れつつも、「庭引田家客、池泛野人舟」とあるように、あたかも隱者のような当時の生き方を懐かしんでいるのである。

残る二人、元行恭と段君彦の詩はどうであろうか。元行恭については、遠欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』には、「北齊後主時為省右戸郎。待詔文林館」（北齊の後主の時、省右戸郎と為り、文林館に待詔す）とあり、また『北史』『北齊書』の史書の記述等からも、北齊の文人であったことがうかがえる。<sup>(18)</sup>

隋・元行恭「過故宅」（故宅に過る）詩	頽城百戰後	頽城	百戰の後
	荒邑四鄰通	荒邑	四鄰に通ず
	將軍樹已折	將軍	樹已に折れ
	歩兵途轉窮	歩兵	途途 <small>みち</small> 轉 <small>うつ</small> た窮す
吹臺有山鳥	吹臺	有山鳥	

歌庭聒野蟲

歌庭に野蟲聒かまひすし

草深斜徑沒

草深くして 斜徑没し

水盡曲池空

水尽きて 曲池空し

林中滿明月

林中に明月満ち

是處來春風

是處こゝに春風來る

唯餘一廢井

唯だ余す 一廢井の

尚爽兩株桐

尚ほ兩株の桐を夾さしはさむを

【大意】

多くの戦ののち、鄴の城は崩れ落ち、荒れ果てた都城は周囲に通じている。後漢の馮異が姿を隠したがごとき大樹もすでに折れ、魏の阮籍の故事のごとく道は尽きはてている。かつて歌舞を奏でた台や庭には山鳥や野の虫が鳴き声をかわしている。小径は雑草に深々とおおいかくされ、池の水は涸れてただ広々としているばかり。(やがて夜がおとずれて) 林の中に月の光が満ち、春風が(自宅のあった)ここにも吹いてきた。自宅の跡地に残されているものといえ、涸れた井戸が一つ、それを挟むかのように生えた二本の桐の樹のみだ。

段君彦については、『先秦漢魏晉南北朝詩』に隋代の人とするのみで、その具体的な事績は不詳である。ただ、次にあげる詩は、先述の元行恭の詩とよく似た語句(「荒壘四郊通」「涸井半生桐」)があることから推察するに、元行恭と同時期に作られた唱和詩の可能性も考えられる。

隋・段君彦「故鄴」詩

玉馬芝蘭北 玉馬 芝蘭の北

金鳳鼓山東 金鳳 鼓山の東

舊國千門廢 旧国 千門廢れ

荒壘四郊通 荒壘 四郊に通ず

深潭直有菊 深潭 直ただ菊有り

涸井半生桐 涸井 半生の桐あり

粉落粧樓毀 粉落ちて 粧樓毀れ

塵飛歌殿空 塵飛びて 歌殿空し

雖臨玄武觀 玄武觀に臨むと雖も

不識紫微宮 紫微宮を識しらず

年代俄成昔 年代 俄にはかに昔と成る

唯餘風月同 唯だ余す 風月の同じなるを

以上、孫万寿の詩二首および元行恭・段君彦の詩二首を紹介し、これらの詩がいずれも斉滅亡後の鄴城を詠んだ詩であることを確認した。ただし、それぞれの詩を細かく見比べてみた場合、孫万寿の「和周記室」詩と残る三首とは、うたう内容に微妙な違いが生じている。先述したとおり、孫万寿「和周記室」詩では、廢墟の鄴の姿を通して、「自らの仕えた王朝滅亡への嘆き・亡国の君主への非難」をうたうことを主眼に置いている。だが、残る孫万寿の「行経旧国」および元行恭・段君彦の詩では、荒廢した都城の姿を通してうたわれるのは、「かつて繁榮していたその地に生きていた自分自身へ

の懐旧の情」である。<sup>19)</sup>

もっともそのような相違があることを認めつつも、この四首の詩には、それ以上に大きく共通する要素があることに注意しなければならぬ。その共通要素とは何かといえは、これまで繰り返し述べてきた、詩人自らが北斉の臣として生きたという体験に他ならない。より具体的にいえば、「繁榮する鄴都の下で生きた自らの半生」がそれである。そしてこの自らの体験が、北斉滅亡と鄴の破壊という事実によつて、もはや取り戻すことかなわぬという痛切な喪失感に転化するとき、鄴都を懐かしむこれらの詩の抒情や主題を支える通奏低音として機能するのである。

#### 四

前節では、北斉滅亡後の鄴城を詠じた詩を紹介した。ここでは、さらに一歩進んで、これらの作品における鄴の詠じ方の特徴について論じてみたい。

そのために、唐代における鄴城を詠じた懐古詩のいくつかを例として挙げ、先の北斉滅亡後の詩と比較してみよう。

張説「鄴都引」<sup>20)</sup>

君不見魏武草創爭天祿 君見ずや 魏武の草創天祿を争ひ

群雄睚眦相馳逐 群雄睚眦がいさいして 相ひ馳逐するを

書攜壯士破堅陣 昼は壯士を携へて堅陣を破り

夜接詞人賦華屋 夜は詞人に接して華屋を賦す

都邑繚繞西山陽 都邑繚繞れうぜうたり 西山みやまの陽

桑榆汗漫漳河曲

桑榆汗漫たり 漳河の曲くま

城郭爲虚人代改

城郭は虚と爲り 人代改まり

但有西園明月在

但だ西園の明月在る有り

鄴傍高冢多貴臣

鄴傍の高冢 貴臣多く

娥眉曼睩共灰塵

娥眉曼睩の(美女) 共に灰塵

試上銅臺歌舞處

試みに銅台歌舞の処に上れば

唯有秋風愁殺人

唯だ秋風の人を愁殺する有るのみ

孫逖「途中口號」<sup>①</sup>

鄴城東北望陵臺、珠翠繁華去不迴。無復新妝豔紅粉、空餘故壘滿青苔。

岑參「登古鄴城」<sup>②</sup>

下馬登鄴城、城空復何見。東風吹野火、暮入飛雲殿。城隅南對望陵

臺、漳水東流不復回。武帝宮中人去盡、年年春色爲誰來。

劉滄「鄴都懷古」<sup>③</sup>

昔時霸業何蕭索、古木唯多鳥雀聲。芳草自生宮殿處、牧童誰識帝王城。殘春楊柳長川迴、落日蒹葭遠水平。一望青山

便惆悵、西陵無主月空明。

これら唐代の懐古詩も、鄴という都市の荒廃した姿を描くことで失われた栄華を嘆くという点では、先にあげた孫万寿ら北朝文人の詩と同様である。だが、それを描く意図について考えた場合、北朝文人の詩と唐代の懐古詩には大きな相違が存在する。それは、荒廃した遺跡の姿を過去の繁栄と対比させて描くことの意味が、前者と後者では本質的に異なることである。言い換えると。前者では、あくまでも自らが帰属していた過去の喪失（北齊という王朝の滅亡・鄴の荒廃）自体への嘆きとその裏に込められた北齊王朝末期の失政への批判、あるいは詩人自身の過去の境遇に対する懐旧の情が主眼であるのに対し、後者は荒廃した遺跡という地から喚起された時間の推移、人為の儂さを詠じることにあるといえる。この点について以下に考察を加えてみたい。

まず北朝文人の手になる、北齊滅亡後の鄴の破滅を嘆く詩の場合を見てみよう。これらの詩がうたう対象は、前節で述べたとおり、北齊滅亡後の鄴の破滅という、作者である詩人自らが実際に体験した直近の出来事についてである。自身も謳歌したであろう鄴という都市の繁栄が、北齊から北周末の戦乱によって忽然と失われたという喪失感、一つの国家の滅亡という劇的な変化に直面し、自らの在りし日々が永久に消失したのだという喪失感こそが、これらの詩の抒情の源泉となっている。

一方、唐代の鄴の懐古詩がうたうのは、そうした直近の国家滅亡に対しての嘆きではない。ここでは、ことごとく三国魏の曹操の時代を対象としている点が端的に示すとおり、後漢末～三国時代という、唐代から数世紀を隔てた、決定的に遠い過去の出来事、さらにそうした時間の断層から喚起される、見ることもない遠い過去への憧憬や過去の繁華の喪失という人為の儂さへの嘆きをうたっている。恐らく唐代の詩人たちが実際に目にしたであろう鄴の遺跡は北朝期のものであるろうが、唐の詩人は、そこから北朝という唐に連結する歴史を見ず、より遠い過去の三国の歴史を想起したのである。これは、懐古の題材として見た場合、唐から数世紀も過去になる三国の歴史故事のほうが、相対的に唐に時代が近い北朝期の鄴よりも適していると判断されたことにある。



むろん北朝文人の作品においても、唐代懐古詩と同様の「過去（栄華）↑現在（荒廢）」という時間の隔たりは、超えがたい断層として確かに存在しているし、そうした時間の断層に直接言及しているものもある（孫万寿「和周記室」の「聞君懐古曲」や段君彦「故鄴」の「年代俄成昔、唯餘風月同」の句）。ただ、孫万寿の詩の「僕本漳濱士、舊國亦滄沱」や段君彦の詩の「俄成昔」のように、これら北朝文人の一連の詩の場合は、詩人の生涯中の極めて短い期間に生じた劇的な変化をうたったものであり、そこでの過去と現在の間にある時間は、作者自身の主観的な心理の上では断絶していても、客観的な時間上では密接するものとして意識されているという点に注意しなければならない。北朝文人のこうした時間意識は、唐代懐古詩における時間意識のような、過去と現在の間にある圧倒的に長い時間の隔たりを前提とした時間の断絶とは、本質的に異なるものだといえよう。

さらに唐代の鄴の懐古詩で三国の歴史がうたわれる理由として、より重要なのは、前者の懐古詩が南朝で成立した鄴の懐古詩の系譜に直接つながる点である。これらの作品の中では、いずれも「銅臺歌舞處」（張説「鄴都引」）、「無復新妝豔紅粉」（孫逖「途中口号」）、「武帝宮中人去盡」（岑參「登古鄴城」）、「西陵無主」（劉滄「鄴都懷古」）とあるように、南朝で成立した鄴を詠じた詩の定型「権力者曹操の遺命により、死後も仕えることを強要された宮女たちの姿」が踏襲されている。これは、「懐古」の詩の中に「閨怨」の要素を加えたものといえよう。すなわち鄴を詠じた唐代懐古詩は、一般の懐古詩に共通する「過去の栄華の喪失」（具体的には「魏武草創爭天祿」、「昔時霸業何蕭索」といった曹操の偉業の喪失）への嘆きに「権力者曹操の運命に翻弄された宮女たち」という悲劇性が加わることで、単なる時間の詠嘆にとどまらない抒情の陰影も詩にもたらすことになったのである。同時にこうした「閨怨」的要素は、曹操の偉業に華やかな彩りをもたらすことで、三国時代の鄴の栄華のイメージをより鮮烈なものとし、懐古詩における「過去と現在」の対比を強調することにもなっている。この点こそが、唐代の鄴の懐古詩と北齊滅亡後の鄴をうたう詩とを大きく分かつているのである。<sup>23</sup>

## 結語

過去から現在そして未来へと、連続と続く時間の流れをいかに意識し、それをどのように表現するかについては、個々の人や文学作品（あるいは別の芸術作品）ごとに多様な可能性が存在する。中国古典詩においてそれは、過去と現在との時の狭間に決して超えられない時間の断層を設置することで、両者の対峙を極限まで先鋭化する、「懐古」の主題様式に結実した。

こうした唐代に完成した「懐古詩」と、本論であつかった、北朝末期の文学者による鄴城への「哀歌」ともいうべき一連の詩は、「失われた遺跡（都市）の栄華を嘆く」という点では共通し、詩中にうたわれる情景も荒廃した遺跡を題材とすることから、きわめて似かよったものとなっている。しかし、前節までで述べてきたように、北朝末期の鄴を詠じた一連の詩は、その栄華が詩人の実体験かそうでないかという点において、後の唐代懐古詩の典型とは決定的に異なる文学作品であることが明らかである。

この相違の存在から、北朝末期の鄴城への哀歌は、六朝期の南朝に萌芽し、唐代に完成に至る懐古詩の系譜（系譜）の中に収まらない「歴史の偶然が生んだ特異な作品群」と評価するべきであろう。これら一連の「哀歌」は、基本、後世の文学様式（様式）において直接の継承者を持つことなくして終わったものであり、中国文学史的には「徒花」といふべき孤立した作品群であるといえる。

ただし、文学史上、北朝末期の鄴城詩が後世において様式上の直接の継承性を持たないことが、即文学史的に無価値であると判断するのは早計であろう。すでに述べたとおり、これら一連の作品は、唐代懐古詩と同様に「時間の隔たり」を抒情の源泉とするという点で、唐代懐古詩を懐古詩たらしめる要因（抒情の構造）を探る上での格好の比較の対象となり

うるからである。北朝末期の文学者による、鄴城の一連の詩は、この特異性と懷古詩との共通性とを梃子に、懷古詩の典型的な様式の特徴を浮かび上がらせることのできる、得がたい対照群となっている。このことは、これらの作品に一定の文学史的意義をあたえるものであるといえるだろう。

これらの作品群の存在は、その孤立性によって、逆説的に懷古詩の特徴がより鮮明にうかがあがるという点で、懷古詩研究の上で、非常に貴重な資料となっているのである。

## 注

- (1) 『中国詩文論叢』第三二集、二〇二二年二月。
- (2) 『専修人文論集』第九九号、二〇一六年一月。
- (3) 本論文で扱う「詩跡」とは、所謂日本文学における「歌枕」「俳枕」に相当し、中国古典詩歌（漢詩）に歌われる名所旧跡を意味する語である。より詳細な説明については、植木久行編『中国詩跡事典』（研文出版、二〇一五年三月）を参照。
- (4) 魏から西晋にかけての鄴城の繁栄を描いた作品としては、名高い西晋の左思「魏都賦」（「三都賦」の一）のほか、左思と同時代の陸雲「登臺賦」にも、「承后皇之嘉惠兮、翼聖宰之威靈。肅言而述業兮、乃啓行乎北京。……爾乃佇眄瑤軒、滿目綺寮。中原方華、綠葉振翹。嘉生民之臺臺兮、望天晷之苕苕」とあり、魏の旧都として鄴の大都会たる様子が描かれている。
- (5) 文献資料や近年の考古学調査に基づく鄴城の復元および魏から東魏北齐までの変遷については、佐川英治「鄴城に見る都城制の転換」（雀添慶文編『魏晋南北朝史のいま』勉誠出版、二〇一七年八月所収）を参照。
- (6) 『周書』卷八静帝紀に「（大象二年八月）庚午、韋孝寛破尉遲迥於鄴城。迥自殺、相州平。移相州於安陽、其鄴城及邑居皆廢之」とある。
- (7) 鄴を中心とする北齐の詩壇の特徴については、盧有泉『北朝詩歌研究』（山西教育出版社、二〇一三年六月）第四章「北朝

詩人的身分類型与地域特徴」を参照。

(8) 『北齊書』卷四五「文苑伝」より。

(9) 尾崎康「北齊の文林館と修文殿御覽」(『史学』(松本信廣先生古稀記念)四〇、一九六七年一月)を参照。

(10) 例として、文林館で編纂された詩集として、『隋書』卷三五「経籍志四」には、「文林館詩府八卷 後齊文林館作」とある。

(11) 以下に挙げる詩の本文で、以後特に注記しないものについては、いずれも遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、一九八六年)による。

(12) 川合康三「うたげのうた」(『中国文学報』第五三冊、一九九六年一〇月)では、三国の建安文学から唐代までの饗宴で作られた文学作品の特質を論じる中、建安文人の公讌詩の特徴を「(詩中で唱われる景物は)公讌という非日常的な時空にふさわしい、祝祭的な場を描き出すものとして機能している」「文人たちが宴に招かれたことを主催者に対して感謝し、主催者をこ」とほぐという要素が、程度に濃淡はあれ、いずれにも含まれている」と整理する。

参考として、魏の曹植の「公讌詩」を以下にあげる。

魏・曹植「公讌詩」

公子敬愛客、終宴不知疲。清夜遊西園、飛蓋相追隨。明月澄清景、列宿正參差。秋蘭被長坂、朱華冒綠池。潛魚躍清波、好鳥鳴高枝。神廳接丹轂、輕輦隨風移。飄飄放志意、千秋長若斯。

(13) このほか、以下の刑部・魏収の詩も、鄴で詠じられた公讌詩の可能性があるが、両者が生きた時期(刑部・四九六～五六一?。魏収・五〇六～五七二)を考えると、東魏・北齊より前の北魏の都(洛陽)でうたわれた可能性も否定できない。ここでは参考として詩の本文をあげるまでにとどめる。

北齊・刑部「三日華林園公宴詩」

廻鑾自樂野。弭蓋屬瑤池。五丞接光景。七友樹風儀。芳春時欲遽。覽物惜將移。新萍已冒沼。餘花尚滿枝。草滋徑蕪沒。林

長山蔽虧。芳筵羅玉俎。激水漾金卮。歌聲斷以續。舞袖合還離。

北齊・魏収「月下秋宴詩」

此夕甘言宴。月照露方塗。使星疑向蜀。劍氣不關吳。良交契金水。上客慰蒼蘇。何必應劉輩。還來遊鄴都。

(14) なお本論文で扱う孫万寿および元行恭の詩に関する先行論文として、原田直枝「江南は瘴癘の地」そして故郷は隋の孫万壽の詩を手がかりとして」（『中国文学報』第七一冊、二〇〇六年四月）がある。

(15) 「北史」卷四七「陽休之伝」・卷八三「文苑伝」・卷九二「恩倖伝」、『北齊書』卷五〇「恩倖伝」に名が見える。

(16) 本文は『毛詩正義』卷四（北京大学出版社）による。

(17) 『毛詩正義』の小序では、「黍離、閔宗周也。周大夫行役、至于宗周。過故宗廟宮室、盡為禾黍。閔周室之顛覆、彷徨不忍去而作是詩也」とある。また後漢の鄭箋では、「遠乎蒼天、仰愬欲其察已言也。此亡國之君、何等入哉。疾之甚」とある。

(18) 『史記』卷三八「宋微子世家」には、「其後箕子朝周、過故股虛、感宮室毀壞、生禾黍、箕子傷之、欲哭則不可、欲泣為其近婦人、乃作麥秀之詩以歌詠之。其詩曰、「……」。所謂狡童者、紂也。股民聞之、皆為流涕」とある。

(19) 孫万寿の詩については先述のとおり。元行恭・段君彦の詩については、「唯餘一廢井」「唯餘風月同」の箇所が、それぞれ「かつて自分がここに生きていたことの名残」として歌われていることから、そのことがうかがえる。

(20) 『全唐詩』卷八六

(21) 『全唐詩』卷一一八

(22) 『全唐詩』卷一九九

(23) 『全唐詩』卷五八六

(24) 注（一）所掲論文参照。

(25) ただし、作品の主要な要素ではなく、作品を構成する要素の一部にすぎなくはあるが、孫万寿「和周記室」詩のように、後漢末～三国魏の鄴を中心に行われた建安文学に言及する部分（臺留子建賦、宮落仲將書）については注意を要する。この

部分は、詩全体の文脈から見た場合、鄴という都市の持つ壮麗さや繁栄が、三国以来の文化を継承した歴史性によることであらわしている。それは一面では、鄴が北斉以前の魏晋の王朝交替期間にいったんは没落した（洛陽に繁栄を持ち去られた）ことよって、唐代の懐古詩と同様に、過去と現在を時間的に遮断する要素が加味されているケースであるともいえる。

(26) 唐代懐古詩の祖型ともいべき南朝の懐古詩については、拙論「六朝後期の詩における懐古の主題」(『人文学報』五一三、首都大学東京人文学部編集委員会、二〇一七年三月)を参照。

(27) ここで述べているのは、あくまでもある作品で特定の主題(ここでは「懐古」)をあつかう際に共通して用いられる一定の様式(型)についてである。個々の作品レベルでいえば、例えば唐の杜甫の「春望」や「哀江頭」のように、後世の作品中にも鄴城への哀歌と共通する要素(詩人自らが実見した都市の興廢を通してうたわれる、時の王朝への批判・失われた過去に対する懐旧の思い等)を見いだすことは容易であろう。